２０２０年度　入門講座

**第34課　永遠のいのち**

**死と永遠の命の希望**

不確かな現代に生きているわたし達にとって確実なことは、誰もが死ぬということである。この事実から目をそらして生きていくことはできない。人間の死と究極的な救いの問題は避けて通れない問題である。

導入科学技術と物質文明から霊性の時代への移行

２１世紀は霊性の時代と言われている。物質文明の栄えたここ百年くらいの間、死後の世界があると心の底から信じる人が減ってしまった。しかし、科学技術と物質文命の進歩は、逆に多くの人々に人間を超えた偉大な何か、宇宙や生命を創造した何かが存在するのではないかという問いを投げかけるようになったのである。

問　a. 死んでしまえばすべては消え去ってしまうのだろうか？

　　　　人が一生かかって築いてきた愛情も死と共に幻影として消えてしまうものか？

　　b. 金とテクノロジーで死を克服できるか？　臓器移植、再生医療、遺伝子操作etc.

　　人間の傲慢さと愚劣さの極致。自分の限りある生を否定。人生に目的があることを否定

Ⅰ　永遠のいのちへの希望

パウロはⅠコリの手紙で、世の終わりに人類が受ける新しい命について語っている。

「私たちの体は「蒔かれるときは朽ちるものでも朽ちない者に復活する。」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　Ⅰコリ14:42

　　１．死は人生における過ぎ越し

死は人間の成長と発達のプロセスの一つである。

人間は、人生の節目に次の段階へと過ぎ越しながら成長する。母の胎内から誕生への移行に始まり、成人式、結婚式と、過ぎ越して行く。そのすべての移行に放棄はつきものであり、前の段階にあった貴重なものの放棄を余儀なくされる。最終の過ぎ越しが死。

復活祭を “パスカ” ともいう。過ぎ越しの意味。イエスも十字架の死を過ぎ越して復活の命

に入られたということである。

* 死へのプロセス；「繭と蝶」の比喩

精神科医、キュープラ・ロス(独)　『「死ぬ瞬間」と死後の生』（１０年前逝去）

２万５千もの臨死体験の研究をもとに、人間の肉体から不滅の霊が解き放たれるさまを繭が蝶に孵化していくようであると説明する。そこには恐怖も不安もないと言っている。　生のありようが変わるのであろう。

移行を象徴するものが、トンネルであったり門であったり美しい野原であったり、文化によって異なるがその向こうに光が見える。死は決して独りではない。守護天使、家族、親しい友、３人が迎えてくれる。白よりも白く、光よりも明るい光に近づくと、無条件の愛に包まれる。一度でもそれを経験したら絶対怖くない。

**２．イエス・キリストの過ぎ越しの秘儀に与る「死」**

キリスト教の中心は、イエス・キリストが十字架上で死に打ち勝って復活し永遠のいのちの内に生きておられるという信仰である。洗礼によってキリストの命に結ばれる者は、死の後にも、復活したイエスとともに永遠のいのちに生きることができると信じる。

一人ひとりの人間が一つの生を生きる。その生は例外なく死によって中断される。**人間の目**から見るから中断されるかのように見える。**神の目**には連続したで、生は不滅である。中断と見えた生は復活の命に変容されているという不思議！

* 神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。（ヨハネ3:16）
* 「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」

（ヨハネ11:25,26）

* 「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれていることが実現するのです。『死は勝利に飲み込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。』死のとげは罪であり、罪の力は律法です。私たちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。」（Ⅰコリ15:54-57）

亡くなった人は、キリストの約束されたとおり、復活して生きる者となる。よっぽど激しく神を否定しない限り神の所に行かれるに決まっている。神の愛は罪より大きいから。（天国の門に立つペトロとテレースの話）その人が生きている間に他者に対して示した温かさと愛は神さまの手帳に残り、百倍の報いをくださる。キリスト者にとって死は悲しみであっても希望がある。死は絶望的で暗いものではなく、**キリストに出会うためのプロセス**であるから。

「この凡夫　凡句　とるに足らぬ陶器のかけら　木屑　すべては不滅のダイヤモンド

　そう　消えることのないダイヤモンドなのだ」英国詩人　ポプキンズ

ポプキンズの一節は、世に隠れた平凡で誰からも注目されず生きて死んでいった何億何千億という人々、その一人ひとりの生が、かけがえのないダイヤモンドのようなものでしかも不滅なものであるといっている。

**永遠性への人間の渇望を示す極端な事例**

自分の名前が永久に歴史に刻まれることを目指し放火という大罪を犯した人物へロストラトス

BC356　エフェゾのアルテミスの神殿　→　裁判官　刑罰としてその名前を一切封印、記録から抹殺する処分。

わたしは死に際してどういう態度をとるか心配。死を恐れてじたばたするかもしれない。

それでも覚えておきたい。イエスが十字架上で、御父に向かって「神よ、なぜ私を見捨てるのですか」と叫ばれたとき、そこに復活への希望を見ておられたということを。

きっと最後の間際に恐れを取り除いて、「全てを捧げます」と言わせてくださるから。

3. 死の準備教育の必要性　　「死んでもすぐ生き返る」子供たちのゲーム

病院で死ぬ人が多く、実際の死に直面する体験が少ない

　パウロの死生観

a.「定められたときは迫っている」Ⅰコリント７：29―31

　　死までの時は確実に縮まっている。わたしたちの持っているものすべてがやがて時の流れの中に消えていく。永遠に自分のものなどない。さわやかなはかなさである。命を含むあらゆるものは一時的にわたしたちに貸し出されたもの。あらゆるものを得た瞬間から失う時の準備をしておいた方が良い。「明日最期の日が来てもいいように、一日一日を自分らしく生きよ」もう何も失うものはないのだから」

b.「死を恐れる必要はない」Ⅰテサ5:1-11,14-15

死も最後の審判も突然やって来るもの、だからといって、死を恐れる必要はない。

　　　自分自身を高める為コツコツと徳を積む、実に単純であるが、難しい。

「何事にも時があり　天の下の出来事にはすべて定められたときがある生まれる時　死ぬとき　植える時　飢えたものを抜くとき」伝道の書3：1－8，9－14

　　　　何事にも時がある。人間のなし得ることには必ず限りがある。そう認識していれば何時いかなる時でも「それは神のはからいだ」と思える。そこに喜び楽しんで一生を送ることのあるいは死を迎えることの納得を見出せる。

c.「決められた道を走り通した」Ⅱテモテ4：6－8

思い残すことはないと言えるように精いっぱい生きた人生。しかし報いられない人生もある。

過酷な運命に翻弄されてもなお義に生きたヨブ。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに

帰ろう」と、一切の不幸不運にも神を恨まず誠実であり続ける。

ｄ.「死ぬことは利益である」フィリッピ1：21-25

パウロは死ぬことは儲けものだと言う。死による解放を望みながら、自分の使命を果たすためにもっと生きて働きたいという思い。現世を精いっぱい生きていく。現世に対する執着から身軽になっていつ死んでもいいように生きたい。

Ⅱ　生きることの意味

死について考えることは人生にどのような意味があるか、生きる意味を問うことでもある。

キリスト教は、生と死の問題に対して、「永遠のいのち」という人間の究極の救いの信

仰を持って答える。この復活と永遠の生命に対する希望こそ、人間に「生きる」意味を

与えるのである。それは、神から自分に託された夢(使命)を充全に生きることである。

人生のゴールが無だとしたら人生の旅は目標を失う。しかし、死に意味があるなら(死のかなたに本当の目的地があるなら)苦しみの多い人生に深い意味があることになる。

「来世に希望を持たぬ人は、この世ですでに死んでいるようなものだ」（ゲーテ）

死は人生の最後の過ぎ越しである。この段階をどのように過ぎ越していくかは生き方次第。

自分の人生に意味を与えてきたものが、死にも意味を与えるものとなる。精いっぱい生きてきたなら死は恐るべきものでも、悲しむべきものでもない。死ぬことを心配するよりも、今日何をすべきかを心配するべきかもしれない。行動ばかりではなく、思いにおいても言葉においても、最高の選択ができるように！

1. 映画『生きる』（黒沢明監督）

死に直面した人間が、自分は誰なのか、何のために生まれて来たのか、どこへ行こ

うとしているのか？真剣に考え，自己を確立していく過程を描いた物語。

独りの人間の死についての映画の題が実は「生きる」ことをテーマにしている。サラリーマンとして役所勤め３０年、突然がんの宣告を受ける。それまでの人生振り返り、何もしてこなかったことに気付く。やり残した仕事、住民の要請に応え公園を作ることに残りの命をかけた。

死を想定してどのように生きたら良いかが見えてくる。（生き方が人の死を決める。）

　　　どれだけ神の愛に応えて生きてきたか？　どれだけ他者に開かれて生きてきたか。

そのことが、すなわち自己実現のへ道であり、人間の成長の完成、幸せにつながる。

1. 生きる知恵

a「自分の置かれた境遇に満足する」フィリッピ４：11-13

貧しく生きるすべも豊かに生きる術も知っている。置かれた境遇の中で、自分が持っている才能を精いっぱい発揮し、自分らしく生ること考える。この方法がいついかなるときにも自分自身を見失わず幸せに生きる術である。神が自分に対して何を望まれているか、自分の使命を生きる。パウロの言う「生きる知恵」。

死を意識して生きる時、初めて現実を過不足なく判断して生きることができるのかもしれない。

b「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、

　イエス・キリストにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(Ⅰテサ5：16－18)

次の三つの鍵を使えば死ぬまでの時間が有意義になる。

1. 第一の鍵：喜びを見つけること。

「喜べ」と言う命令は実に稀である。どんな状況にあっても喜ぶべき面を見出すことが、

人間の悲痛な義務である。

1. 第二の鍵：祈ること。

全てを見ておられる神に、苦しい胸の内やお願いしたいことなどを神に話しかけるると、

これほど心休まる方法はない。

1. 第三の鍵：感謝すること。すべてのことを感謝できる心を持つこと。

Ⅲ　死後の世界

人間は死んだらどうなるのか、死後の生命は果たしてあるのかという疑問に対して、体験的に教えてくれる人はだれもいない。科学的に証明することは不可能である。しかし、逆に死ですべてが終わるという証明も不可能であろう。

1. キリスト教は生と死の問題、人間の究極の救いの問題に対して、

「体の復活」「永遠の命」という信仰をもって答えている。

天国；天のどこかにそのような場所があるというより、神の命に完全に預かること。

神の愛がすべてを支配し照らしている状態。神に満たされること。

祈りは神の国の味見のようなもの

地獄：人間は神の命を断る可能性を持っている。神の恵み、愛を断り、神を離れることが永遠の滅びになる。「神から離れること以上の悪はない。」（カール・ラーナー）

煉獄（浄め）：神の愛に十分応えて生きているとは言えない私たちは、罪の状態で神

の栄光に与ることはできない。神の前に出る前に、自分の汚れを浄める必要が

ある。これが「煉獄」として表現されている。最終的な浄めは神との出会いに

よって行われるが、現実の生活の中で、人間関係や出来事を通して浄められる。

審判、再臨などの思想はキリスト教の希望のシンボルである。

参考；「死後の命を信じるか」

　　　＊来生信仰；古代エジプトのピラミッド、ミイラ、墓の壁画etc.

＊アメリカの先住民族の間にある生者と死者の霊的な一体感

（新井満「千の風になって」）

＊古代ギリシャ哲学；ソクラテスやプラトンの霊魂不滅説

　　　　人間の本質である霊魂は本来不滅であり、その魂は死後肉体を離れて新たな存在

の次元に移るとする説。

　　＊ドイツの哲学者カント；

「人間には、道徳的法則の命令によって、完全なる者となることが義務付けられ

ている。この壮大な義務を果たすために、無限の高みを目指すので死を超えてな

お存在することが必要。魂は不死である。

＊ドイツの文豪ゲーテ；霊魂の不滅をたとえで示す。

　死とは日が落ちる時のようなものだ。私たちの目からは隠れて見えなくなってし

まっても太陽そのものは地平線の向こうで変わらず輝いている。それと同じよう

に、生命は死後も変わらず存在し続けるのだ。

フランスの科学者ブレーズ・パスカル；

人間の不滅性と死後の生命を信じるか否かの決断を、一つの賭けと見なす。

　　　　　もし、人が死後の生命を信じていたのに、実はそれが存在しなかったとしても、何も損したことにならない。しかし、死後の生命が存在するにもかかわらず、それを信じなかったために手に入れそこなったら取り返しがつかない。その人は永久に全てを失うことになる。」「信じればすべてを手に入れることができ、失うものは何もないのだから、信じる方に賭けるべきだ」

スイスの心理学者ユング；

人間は死後の生命の存在を信じることが、精神衛生上重要な役割を果たす。

２．「終末」という語の意味

ギリシャ語「エスカトン」と言う語の意味は「究極的で一番深い奥義」をさす。

「終末」を「終わり」とか「最後」の意味で捉えると狭くなり、本来の意味からずれる。むしろ遂にやってくる究極的なもの、永遠に生きる希望ともいえるものを表している。

キリスト教の終末論にとって決定的なことは、「イエスの死と復活」である。私たちは、キリストにおいて、希望を持って生きることに招かれている。信仰は人を希望へ導き、希望の道は「無条件な愛」の体験から始まる。キリスト教的な終末論的生き方とは、この無条件な愛を生きることである。

「やさしい光よ　私を導いてください

私を取り巻く闇の中で　私を導いてください

私は遠い景色まで見ることを要求しない

次の一歩がわかれば　それで足りる」　ニューマン